

■光格天皇 皇位継承危機に、傍流から天皇になり、長期に在位、幕府に対抗して、復古再興に努め、権威を高めた。

こうかくてんのう

御蔭参流行・1771=

中御門天皇の弟直仁親王に始まる最も新しい宮家閑院宮2代典仁親王の第六王子に生まれる。名は祐宮。のち大江磐代と呼ばれる母は、伯耆倉吉出身の浪人医師の娘で、天皇の母として、異例に身分が低い。

田沼意次老中1772= 1歳

宮家の決まりとして、聖護院門跡を継ぐため、忠善法親王の付弟となる。弟寛宮が誕生。

源内獄中死・1779= 8歳

後桃園天皇が急逝、それを秘しての朝幕の交渉で、白羽の矢が立ち、形式的に天皇の養子されて、踐祚。江戸時代初の実子でない異例の天皇になる。名は兼仁(ともひと)になる。摂政は九条尚実、父たる上皇はおらず、女性の後桜町上皇がそのまま続く。

..... 1780= 9歳

(江戸時代の天皇の平均即位年齢は13歳で格別若年でなく)即位礼が挙行され、

..... 1781=10歳

元服。「禁中并公家中諸法度」により、天皇には、学問、和歌が義務付けられ、管弦がそれに準じ、この年の学者による「講書」で学問が、後桜町上皇による和歌の教育が始まり、歌会始でデビュー。

天明大飢饉始1782=11歳

実父閑院宮典仁親王の御所内での席次が、父の弟の左大臣鷹司輔平より下という低さに驚愕、太上天皇の尊号宣下を願い、幕府から拒否されるも、経済的な優遇措置を引き出す。

蘭学階梯・1783=12歳

幕府の七か年儉約令は、以後、長期にわたって続く。御乗始で、筆を学び、御所作始でデビュー。

意知刺殺事件1784=13歳

この年から盛んに「御内会御歌会」をするなど、和歌と管弦の集中的教育と鍛錬、

蝦夷初調査・1785=14歳

この年までに、「大学」「論語」の講読が終わり、以後、会説や輪講により、近臣たちに学問を奨励。再び、尊号宣下の意向を示す。摂政九条尚実が閑白となるも、発病して、政務ができなくなったこともあり、京都近郊で捕獲された「白鳥」が献上され、吉兆示す瑞鳥と認定。***田沼意次の失脚に続く将軍家治の死去による幕府の動揺をみすかしてか、早くも自ら朝廷政務を主導し、強引に、朔旦冬至旬と(恩)赦、内侍所仮殿を造営と新嘗祭を実施、以後、復古再興に取組み始める。**

寛政改革始・1787=16歳

幕府の財政は急速に悪化し、朝廷にも儉約を求める。侍医も「小児科」から「大人科」に代わり、四方拜にも初出御、一人前の天皇として儀礼に臨むようになり、大嘗会も復古。朝廷自体を律するべく、公家五人の失態に叱責。九条尚実が辞職、父の弟の左大臣鷹司輔平が閑白になる。米価高騰に、御所千度参りが始まるのと、追い散らさないように指示、参加者は約五万人になり、直訴も受け入れて、幕府に、空前となる窮民救済を申し入れて実現させるなど、君主意識も芽生える。発病し、一時は深刻な容態になるも、無事に回復。

..... 1788=17歳

瘡痂にも罹るが回復。後桜町上皇が、公家に、「天皇を見比べて学問出精せよ」と言ったことが伝わるように、好学ぶりは民間にも流布していた。(応仁の乱以来の大惨事)京都大火で御所が炎上、偶然か、天皇にならなければそこにいたはずの聖護院が仮御所になる。古儀採用の新御所造営について、幕府の了解を勝ち取ると、(30年にわたって)平安時代の内裏の考証に没頭してきた裏松光世(固禪)をブレンに、

初の横綱・1789=18歳

最初の皇子が誕生するも即日死去、以後、44年間に19人の皇子・皇女が誕生するも、ほとんどが1歳未満で死去、成人したのは2人だけであった。実父閑院宮典仁親王への太上天皇尊号宣下の沙汰書が老中松平定信に達して、問題が本格化するが、閑白鷹司輔平が幕府よりでラチが開かず、

異学の禁・1790=19歳

御所を復古造営し遷幸、華麗な行列が人々に強烈な印象を与え、多くの行列従いが遭る。新宮向も再興。感謝の気持ちから、将軍徳川家斉に漢詩を賜って感激されるとともに、幕府に従い、儉約励行し始める。

混浴禁止・1791=20歳

公家の間で、空前の復古ブームになり、裏松光世は引っぱりだこ。鷹司輔平を更迭して、一条輝良を閑白にし、尊号宣下について公卿群議で圧倒的支持を得るも、幕府を無視する形で、内侍所仮殿を神嘉殿にするなどして、松平定信の不信を買い、弱点となる朝廷側の不行跡に対し、公家への処罰・統制を強める。

ワクマン来日・1792=21歳

それまで、武家伝奏が所司代屋敷に行くだけだったのを、所司代も伝奏屋敷に来るようにさせるなど意気軒昂であったが、***尊号宣下を強行しようとするも、幕府の強い姿勢を知って、中止するに至った上、議奏中山愛親と武家伝奏正親町公明が江戸に召喚され、強く尋問された後、中山は閉門、正親町は逼塞、さらに、武家伝奏万里小路政房と議奏広橋伊光は差控で、全て免職。交換のように、閑院宮典仁親王には、さらなる経済的優待がされるも、完全な敗北に終わった。朝廷の権威を回復すべく、不行跡公家九人を尋問、**

松平定信引退1793=22歳

幕府にも尋問させる意向を示す。

ワヅナ 正月・1794=23歳

後桃園天皇の遺詔どおり、唯一の皇女欣子内親王が入内して、中宮(皇后)になり(江戸時代の中宮は4人しかおらず、近世最後)、正統な血筋に戻す役割。実父閑院宮典仁親王が死去、追悼の阿弥陀仏号千遍書以降、神武天皇から120代という皇統意識をもった署名を始める。実母大江磐代は出家。この間、後桜町上皇から、天仁遠波(てにをは)伝授に始まり、和歌三部抄、伊勢物語、古今和歌集、和歌一事の伝授を受け、

ポルトガル来航・1796=25歳

朝廷支配を確立すべく、不行跡公家九人の処罰に始まり(歴史書「続史愚抄」や随筆「閑窓自語」で知られる柳原紀光も永蟄居)、続いて、遊興の公家一七人の処罰、その他三五人の公家に誹責を命じているが、高位高官を含む多数の堂上公家を一度に処分したのは、宝暦事件以来で、人数は前代未聞、

昌平饗始・1797=26歳

裏松光世に命じ、「大内裏図考証」の清書本が献上された。新たに、琵琶も学び始め、

古事記伝・1798=27歳

江戸時代としては、飛びぬけて多い100回を超える禁裏和歌会、管弦の会も63回に上る。

蝦夷地直轄始1799=28歳

後桜町上皇から教訓を受けたのに対して、君主としての心構えを示した長文の書状を送っている。

伊能測量始・1800=29歳

中宮に、待望の(第五)皇子が誕生するも、すぐに死去。第六皇子恵仁親王(のち仁孝天皇)誕生。'因らずも天皇になった'という意識から、残っていた石清水・賀茂臨時祭の再興を表明、**伊勢公卿勅使を復古して、神宮に御製和歌を奉納した際にも、'因らずも天皇になった'意識を表明している。'小夜聞書'ははじめ、尊号事件を素材に広く流布した実録物では、朝廷が勝利した筋書きで、偶然即位することになった天皇への同情がみられるなど、庶民の間では、朝幕関係は逆転し始めた。**

宣長没・1801=30歳

石清水・賀茂臨時祭の再興について、幕府との交渉が具体化、経費の問題が障害になるが、熱意で突破、

イノノ報復・1806=35歳

幕府からロシアとの紛争報告、以後、対外情勢も朝廷報告の対象になり、大政委任論は衰えて行く。

ワヅナ船狼藉・1807=36歳

太政官印を再興。

問宮海峡発見1808=37歳

恵仁親王を皇太子とする。

浮世風呂・1809=38歳

実母大江磐代が死去、自らが天皇の母になったことを語らず、院号もつけられず、数奇な運命を終えた。**石清水臨時祭が380年ぶりに再興。後桜町上皇が死去、供養のための真言百八遍奥書に「大日本国天皇兼仁合掌敬白」と自署、天子でも天王でもない天皇という意識が明確に記された。当時、天皇の称号はほとんど使われず、主上、禁裏、禁中などと称されていた。**

高田屋拿捕・1812=41歳

賀茂臨時祭の再興(応仁の乱以来)になると、神祇官再興の意思もあったが断念し、讓位を公表。

浮世床・1813=42歳

中宮に、第九皇子悦仁親王誕生するも、5歳で夭折。

黒住教・1814=43歳

***桜町殿(仙洞御所)に行幸し、恵仁親王(仁孝天皇)に讓位。在位年数38年は、後花園天皇を超える異例の長さで、2019年に明仁天皇が生前退位して、「光格天皇以来」と表現され、にわかに注目されることになった。後花園天皇後、実子が皇位を継承してきたが、以後の天皇は、光格天皇の血統を継いでいる。太上天皇(上皇)となるも、禁裏では、仁孝天皇もすでに18歳になっていて、形式的な院政ではあったが、多くのことについて、意見を聞かれ、指示を与えており、まさに、最高実力者であった。**

伊能測量終・1816=45歳

杉田玄白没・1817=46歳

水野忠成老中1818=47歳

その後、仁孝天皇に大嘗会神饌伝授、和歌天仁遠波、和歌三部抄、伊勢物語まで伝授、**将軍徳川家斉が、従一位左大臣、將軍就任前の世子家慶が、正二位内大臣、御台所も従二位と、いずれも先例を超える昇進いずれも認めたお礼に、幕府から修学院御幸の再興を勧められ、**庭園の修理をさせた上、**90年ぶりの修学院御幸、その行列を多くの町民が拝見した。**将軍徳川家斉の実父徳川治済の准大臣昇進に同意。以後、毎年、1,2回、修学院御幸、徳川治済死去。将軍徳川家斉が、朝廷に、太政大臣昇進を求めるという難題にも、認める裁定を下した。

藤栗毛終・1822=51歳

松平定信死去。四方拜に出御しなくなり、

シボク小鳴瀧塾1824=53歳

自らの代わりに聖護院門跡になっていた弟の盈仁法親王が死去。

異国船打払令1825=54歳

前年に、最後の皇子が誕生するも、この翌年死去。

日本外史・1827=56歳

最後の修学院御幸。

シボク小追放・1829=58歳

將軍が徳川家慶に代わり、徳川家斉の太政大臣昇進のお礼を要求、幕府が朝観行幸再興を認める。

富籤流行・1830=59歳

中風を發し、半身不随で、言葉を発せられなくなる後遺症。幾分は改善するが、

高島砲術・1834=63歳

中風が再発、仁孝天皇に古今和歌集伝授し、没した。翌年、874年ぶりに天皇号が贈られ、諡号も合わせると954年ぶりの再興で、再興にかけた生涯を象徴している(それまでは、死去後、院号で呼ばれていた)。

..... 1836=65歳

大塩平八郎乱1837=66歳

適齋アブソ・1838=67歳

勅進帳初演・1840=69歳

藤田覚「光格天皇 自身を後にし天下万民を先とし」、